

# イギリス保守党・保守主義の 現状に関する一考察(2)

—— 党首ジョンソンとワンネーション保守主義の視点から ——

渡 邊 容 一 郎

1. はじめに
2. 2019年党首選挙に見るジョンソン保守主義の特質と意義
3. ワンネーション保守主義から見たイギリス保守党の変容
4. おわりに

## 1. はじめに

本稿の目的は、イギリスのジョンソン (Boris Johnson) 首相とワンネーション保守主義に焦点を当てて、これら二つの視点からイギリス保守党・保守主義の現状ないし変容を考察することにある。それによって、現代イギリス政治への理解をより深めることができるからである。同時に本稿は、拙稿「イギリス保守党・保守主義の現状に関する一考察—保守党中道派の保守主義に焦点を当てて—」(『政経研究』第54巻第4号, 日本大学法学会, 2018年)の続編的性格をもつ。

周知のようにジョンソンは、欧州懐疑主義者, hard BREXITER, EU 強硬離脱派,あるいはポピュリスト(例えば「イギリス版トランプ」といったように, EUをめぐる態度もしくはその表面的な姿でのみ評価されているといっても過言ではない。

しかしながら, キャメロン (David Cameron) 元首相が最近刊行した回顧録によると, 確かにジョンソンは, 欧州懐疑派ではあるものの, EU 離脱を主張

したことはこれまで一度もなかったとされている。にもかかわらず EU 離脱の是非について相当迷った挙句、結局離脱キャンペーンに加わる決心をしたというのである。キャメロンによれば、ジョンソンは従来からレファレンダムの実施を強く訴えてきた。ところが当のジョンソンは、離脱派が敗れるとも思っていたので、2016年 EU レファレンダムの結果（離脱派の勝利）に大変驚いていたとされている<sup>(1)</sup>。そのため、現「党首」ジョンソンとその保守主義を分析対象とすることによって、イギリス保守党・保守主義の現状や変容に関しても、ある程度解明できるのではないかと考えられるのである。

そこで本稿は、イギリス保守党史研究の立場から、先ずイギリス保守主義の基本的性格などを明らかにしたうえで、2019年の党首選挙等で示されたジョンソンの政策的立場（保守主義）を分析し、その特質と意義について考察する。さらに、ジョンソン保守党・保守主義の現状をより詳細に把握するため、伝統的な「ワンネーション」(One Nation) 保守主義に関する新しい捉え方の紹介なども踏まえたうえで、ジョンソン党首誕生に伴うイギリス保守党・保守主義の変容を再検討していくことにしたい。

## 2. 2019年党首選挙に見るジョンソン保守主義の特質と意義

### (1) イギリス保守主義の基本的性格と現状

保守主義 (conservatism) の一般的特徴として、一つの一貫した理論体系というより、対抗すべき相手との関係でその都度自らの議論を組み立ててきた相対的立場という側面<sup>(2)</sup>を指摘することができよう。それゆえ、保守主義を理解するためには、保守主義者とその対抗相手とのライバル関係を中心とした歴史的再検討が不可欠<sup>(3)</sup>となる。またイギリスの政治学者リーチ (Robert Leach) も、保守主義は環境の変化に合わせて発展し変化を遂げてきたとしたうえで、「保守主義」という言葉と関連づけられるのは「プラグマティズム」や「柔軟性」が普通だと述べている。それに加えてリーチは、予め考え出されたセオリーの代わりに直近の実際的諸問題への対応をより重視してきたのがイギリス

保守党なので、イギリスにおける「保守」の理念は、保守党や保守党政治家一人ひとりの実践 (practice) から推論しなければならないこともある<sup>(4)</sup>と主張する。

したがって、イギリス保守主義を理解するためには、それが如何なる政治的立場や思想 (thought) であろうと、あるいはどのような態度または行為であろうと、イギリス保守党という政党との関連を無視することはできない。

では、イギリス保守主義の基本的性格をイギリス保守党との関連で捉えた場合、両者の現状について、どのような点を指摘することができるのであろうか。その答えを見出すため、イギリスの政治学者リンチ (Philip Lynch) が示した、ステイトクラフト (statecraft)・選挙でのアピール・イデオロギー・ヘゲモニー (hegemony) から成る「四つのパースペクティブから見たイギリス保守党の優位／衰退に関する具体的事例」(表1)を基に検討してみよう。

リンチも指摘するように、表1の中でとりわけ重要だと思われるのは、「ヘゲモニー」というパースペクティブから見たイギリス保守党の現状であろう。それを見る限り、21世紀現在の保守党・保守主義の将来については、EU 離脱を実現したとはいえ、やや悲観的にならざるを得ない。

周知のように現在のイギリス保守党は、保守党ステイトクラフトの相対的優位をこれまで支えてきたヘゲモニー面の諸要素、国家構造・連合王国・ヨーロッパ・国民的一体感 (nationhood) 全てにおいて、その優位と一体性を従来ほど維持できなく (できにくく) なっているからである (表1を参照)。このような現状についてリンチは、「コンサーバティブ・ブリテン」(Conservative Britain) の終焉であると同時に、保守党アイデンティティの危機でもあるとしている<sup>(5)</sup>。その背景に、ニューレーバー (New Labour) 政権時代の経験、スコットランドに代表される国内地域ナショナリズムの抬頭、ヨーロッパ統合の深化と拡大、そしてグローバリゼーションの負の遺産などがあることは間違いない。だがそれに加え、サッチャー (Margaret Thatcher) 以後における——1990年代から現在に至る——保守党・保守主義の思想的戦略的不安定さや不確実性なども、存外重要ではないかと考えられるのである。

表1 四つのパースペクティブから見たイギリス保守党の優位／衰退に関する具体的事例

パースペクティブ	保守党が優位にある場合	保守党が衰退していく場合
ステイトクラフト	統治する能力：「統治する政党」 健全な経済運営 党内団結 反対党の分裂	メジャー政権期の失策 ERM 離脱 恒常的な党内分裂 ニューレーバーの存在
選挙でのアピール	階級の垣根を越えたアピール： 中産階級と主要労働者階級からの支持 国民政党：グレートブリテン、 都市部・農村部からの議席獲得	中産階級支持の減少：「包括」 政党としてのニューレーバー イングランド南部・農村部に 支持層が限定
イデオロギー	1. プラグマティックな適応 保守党としてのナラティブ および「ミドル・ブリテン」 2. アジェンダ・セッティング： サッチャリズム	1. プラグマティックでなく イデオロギー志向 2. サッチャリズムが自然的 保守主義の諸価値を危険に 晒すような状況
ヘゲモニー	「コンサーバティブ・ブリテン」 党としてのセルフイメージと、 関連するナラティブ： 1. 国家構造：連合王国との 共存関係 2. 帝国とヨーロッパ 3. 国家の存在：「国民政党」 4. 経済：市場経済と福祉国家 5. 社会：ミドル・イングランドの党	「コンサーバティブ・ブリテン」 の終焉 戦略の不安定さと アイデンティティの危機： 1. 国家構造改革と国内 地域自治政府の存在 2. ヨーロッパ統合の影響 3. 国民としての一体感の喪失 4. 国家と市場の役割が不明瞭 5. 「壊れた社会」

出典 Philip Lynch, “Cameron, Modernisation and Conservative Britain”, in Simon Griffith and Kevin Hickson (eds.), *Ideology after New Labour* (Basingstoke: Palgrave Macmillan) 2010, p. 120の表15.1より。( ) 本稿執筆者)

いずれにせよ現在のジョンソン保守党・保守主義は、こうした文脈・視点から理解されねばならない。英国独立党（以下 UKIP）や BREXIT 党の存在なども踏まえれば、現在のイギリス保守党・保守主義は、新たな時代に相応しい主要右派政党としてのアイデンティティ構築（戦略）を模索している段階であり、その一環として「EU 離脱」もあるということができよう。

## (2) イギリス保守主義の諸相とジョンソン保守主義分析の手がかり

既述のようにイギリス保守主義は、環境の変化に応じて進化・発展を遂げて

表2 現代イギリス保守主義の進展 (19世紀後半～現在)

時期	種類・タイプ	政治家と思想家
...	...	...
1860年代, 1870年代	ディズレーリの保守主義 「ワンネーション」, パターナリズム 愛国主義と帝国主義 「トーリー・デモクラシー」	ディズレーリ ランドルフ・チャーチル
1880年代半ば ～1930年代	ユニオニズム (連合統一主義) アイルランド分離独立に反対 帝国特惠関税, 保護貿易主義 社会改革	ソールズベリ ジョセフ・チェンバレン バルフォア ボールドウィン
1940年代 ～1960年代	戦後「ワンネーション」保守主義 ケインズ主義, 混合経済 福祉国家, 労組の懐柔 大英帝国の解体, 計画化	チャーチル マクミラン バトラー マクロード
1970年代, 1980年代	「サッチャリズム」 自由市場, 競争, 民営化 伝統的保守主義の諸価値— 強い国家, 国家主権の擁護	サッチャー ジョーゼフ (ハイエク) (フリードマン)
1990年～2005年	サッチャー以後の保守主義	メージャー, ヘイグ ダンカンスマス, ハワード
2005年～	現在の保守主義 「思いやりのある保守主義」 環境問題への関心 「大きな社会」, 債務削減 歳出削減, 欧州懐疑主義	キャメロン, オズボーン ゴープ ジョンソン

出典 Robert Leach, *Political Ideology in Britain*, third edition (London: Palgrave) 2015, pp. 65-66の表3.1より一部抜粋。( ) 本稿執筆者)

きた。表2「現代イギリス保守主義の進展 (19世紀後半～現在)」からも分かるように、イギリス保守主義は時代毎に、その都度様々な「顔」を見せてきたと  
いってよい。



前出のリーチは、保守主義の核となる諸概念やそれらの実施をめぐって、(政治家、研究者を問わず)保守主義者は激しい論争を展開してきたと述べている<sup>(6)</sup>。イギリス保守主義がそうした論争の対象となりやすい理由は、そこに内在する柔軟性や流動性、多面性、あるいはその包括性に求めることができよう。別の表現をすれば、対抗相手から何かを『保守』するという共通の「目標」(戦略)があったとしても、その目標・戦略を達成するための詳細かつ具体的な「手段・方法・優先順位」(戦術)などをめぐって、保守主義者同士で意見の対立や、それに伴う論争ないし主導権争いが生じやすくなるからである。

したがって、表2で時系列的に示された保守主義の「種類・タイプ」は、いずれもその時どきの保守党内論争や主導権争いに勝利を取めた人物を通して——それぞれの立場を代表して立候補した政治家が保守党「党首」に就任する形で——展開され、具現した内容(保守主義)ということができる。

そうした理由により、一口にイギリス保守主義といっても、多種多様な種類・タイプがあるのはむしろ当然ということになる。例えば「戦後イギリス保守党の四大イデオロギー的立場」について、イギリスの政治学者ヒックソン(Kevin Hickson)は、伝統的トーリー主義(Traditional Toryism, 後述)、ニューライト(New Right)、中道派(Centre)、そしてワンネーション(後述)に分類しており(表3)、これらに共通するプリンシプルのようなものが仮にあるとすれば、それは「不平等の容認」ではないかと論じている<sup>(7)</sup>。

このようにイギリス保守主義の分析方法や、それに基づく類型化については、唯一絶対の基準や分類法があるわけではない。そこで本稿では、単純で比較的分かりやすいという理由から、表3のヒックソン・モデルをジョンソン保守党・保守主義分析の手がかりとしていく。いずれにせよ、こうした複数の傾向や立場全てが同じ「イギリス保守主義」で括られ得る事実を念頭に置いてジョンソン保守党・保守主義を捉え直す必要があるといえるのである。

### (3) 2019年党首選挙に見るボリス・ジョンソンの政策的立場

2019年のイギリス保守党党首選挙に関しては、イギリスの政治学者クライン

表3 戦後イギリス保守党の四大イデオロギ－的立場 (ヒックソン・モデル)

①伝統的トーリー主義 (Traditional Toryism)	
個人の自由を保障する伝統的社会構造の重視	
個人に対する不介入とそのための最小国家の強調	
イングランド人性 (Englishness) を軸とするナショナル (ブリティッシュ) アイデンティティの重視	
性向 (character) の強調	運命論的要素と好戦的側面
伝統的社会道德の擁護	
②ニューライト (New Right)	
効率化と自由化の強調	戦後の国家介入を批判
ポピュラー・キャピタリズム	
③中道派 (Centre)	
個人の自由を保障するコミュニティの重視	
党内左右対立の融和に伴う党内団結の維持	
公共サービス改革志向を踏まえたプラグマティックで党忠誠的な伝統の尊重	
④ワンネーション (One Nation)	
ディズレーリの理念の強調	社会問題への国家介入を志向
国家に対するポジティブな態度	国家介入主義と自由市場主義の併存
思いやりのある保守主義	

出典 Kevin Hickson (ed.), *The Political Thought of the Conservative Party since 1945* (Basingstoke: Palgrave Macmillan) 2005, pp. 1-4に基づき筆者作成。

ズ (Andrew Crines) を通じて最新の分析がなされている。そこで本稿は、ヒックソン・モデルに加え、以下のクラインズによる分析も手がかりとしながら、ジョンソン保守党とその保守主義の現状に迫っていくことにしよう (2019年保守党党首選挙における主要候補者の政策的立場と投票結果については、表4を参照のこと)。

報道でも伝えられたように、院内保守党での予備選挙を当初から独走していたジョンソンは、党員決選投票の対抗馬ハント (Jeremy Hunt) にも圧勝を収めてメイ (Theresa May) の後継者となった。したがってジョンソンは、保守党「下院議員」からも地方「草の根」から「党員」からも、終始一貫圧倒的な支持を集めていたといつてよい<sup>(8)</sup>。

こうした事実を踏まえたうえでクラインズは、近年の保守党党首選挙におけ

表4 2019年イギリス保守党党首選挙主要候補者の政策的立場

候補者名	(イ)	(ロ)	(ハ)	主な立場・主張
ジョンソン	114	160	92,153 66%	主権回復重視の強硬離脱派（合意無き離脱もやむなし） EU域外との通商協定重視 高所得者層の減税 移民制限のさらなる強化 連合王国団結を尊重
ハント	43	77	46,656 34%	合意無き離脱も排除しない穏健離脱派 （2016年は残留支持） 法人税減税 若者向け住宅の整備 起業家的精神の尊重 国家介入よりも仕事の創出を重視
ゴープ	37	75		合意無き離脱も排除しない穏健離脱派 （2016年は離脱支持） モダナイザー的キャメロン保守主義に傾倒 自由市場・個人主義・コミュニティの再活性化
スチュアート	19	×		合意無き離脱に反対（候補者中唯一） 福祉国家重視 合意重視型のキャメロン保守主義だが国家介入も志向 反ジョンソン候補者として社会を相対的に意識

出典 党首選挙結果に関する新聞記事や報道内容などに基づき筆者作成。

備考：(イ) 予備選初回投票結果（保守党下院議員313人中：票数）

(ロ) 予備選最終投票結果（同上）

(ハ) 党員決選投票結果（保守党員約16万人中：票数および得票率）

■ は、決選投票進出候補者

る傾向として、各候補者が「保守主義」をどのように理解するか、その個人的見解を主張する舞台となりつつある点に注目した。クラインズによると、「党首選候補者の大多数が自由市場リベラリズムという中心柱を喜んで奉じつつ、各候補者の主張にはイデオロギー的なまとまりもかなり見られる」<sup>(9)</sup>とされる。また、クラインズは「保守党員の保守主義自覚」に関する YouGov 調査結果（表5）からも、そうした傾向は明白だと述べている。

では、その政策的立場から見て、ジョンソンは如何なるタイプの保守主義者に分類できるのであろうか。表4で示した主要候補者四人の主な立場・主張をヒックスン・モデル（表3）に照らし合わせてみると、スチュアート（Rory



表5 保守党員の保守主義自覚に関する YouGov 調査結果

自分は：	
・サッチャー派	56%
・自由市場保守主義者	43%
・トラディショナリスト	31%
・ワンネーション保守主義者	30%
・リベラル保守主義者	25%
・モダナイザー	20%
・キャメロン派	13%
・これらのいずれでもない	6%
・分からない	3%

出典 <https://yougov.co.uk/topics/politics/articles-reports/2019/06/18/four-more-discoveries...> に基づき筆者作成。

Stewart) は「ワンネーション」、キャメロンの盟友だったゴープ (Michael Gove) は「中道派」、そしてハントは「ニューライト」に分類することが可能となる。もちろん、これらはいくまで「理念型」のようなものであって、如何なる保守党議員であっても、自分の中で様々な「諸傾向」が混在・重複していたりするのが一般的といつてよい。

2019年党首選挙でジョンソンが示した主な政策的立場(表4)を見る限り、ジョンソンは自由市場リベラリズムを基調としつつも、ヒックソン・モデル(表3)で示された「伝統的トーリー主義」を比較的強調していたように思える。カリスマ性と全国的知名度で他の候補者の追随を許さないジョンソンといえども、「総選挙」ではなく「保守党の党首選挙」を勝ち抜くためには、先ず「その大半が(ロンドンなど大都市圏以外の)イングランドから選出された」党下院議員から、次に「イングランドを中心に反EUで社会保守(同性婚に対する嫌悪など)、そして高齢の白人男性が比較的多いとされる」一般党員から、それぞれ十分な支持を獲得しなければならないからである。

例えば、主権回復を重視するための、EUからの(合意無き離脱も含む)強硬離脱方針や連合王国団結の尊重、あるいは(キャメロン政権期に実現できなかった)移民制限のさらなる強化策は、上述した保守党草の根の声を反映した

「Englishness を軸とする National (British) アイデンティティの重視」に繋がるし、また、富裕層の保守党支持者向けといえる「高所得者層の減税」策は最小国家論に通じるものがある。もちろん、アメリカ合衆国に代表される EU 域外諸国との通商協定論が、サッチャー以来イギリス保守主義の「共通言語」となった「自由市場主義」と合致するのはいうまでもない（表3、表4を参照）。

このようにジョンソンは、保守党議員や一般の保守黨員ならその大半が希求すると思われる「英国の偉大さ、の復活という「目的」のため、「議会主権回復・移民規制強化・連合王国の団結維持」など単純で分かりやすい「手段」を訴えて成功した「伝統的トーリー主義者」として理解することも可能なのである。クラインズによれば、ジョンソンのこうした側面は「民衆的保守主義」(popular conservatism) という伝統的形態の追求とされている<sup>(10)</sup>。

したがってジョンソン保守主義の特質の一つは、深化した EU の影響力行使（加盟国内政治への圧力）への実践的対応ないし対抗手段として、現代保守党・保守主義の核となる「自由市場リベラリズム」に加え、ヒックソン・モデルの「伝統的トーリー主義」、そしてクラインズの指摘する「民衆的保守主義」、これら三つを総合している点に見出すことができよう。また、こうした特質をもつジョンソン保守主義の意義としては、サッチャー以来イギリス保守主義のメインストリームとなった「自由市場リベラリズム」の根深さや重要性に加え、それも含めた党全体の相対的「右傾化」<sup>(11)</sup> 傾向も指摘できるかもしれない。

ジョンソン保守党・保守主義の現状と変容（右傾化）をより詳細に把握するためには、現在のイギリス保守党でそうした立場が——特にジョンソン党首の誕生を通じて——圧倒的支持を集めるようになった要因についても考察していく必要がある。そして筆者は、前述したワンネーション保守主義こそ、ジョンソン保守党・保守主義の現状ないし変容を理解するカギになるのではないかと考えている。そこで次章では、「ワンネーション」という概念をキーワードに、ジョンソン保守党・保守主義について再検討していくことにしよう。

### 3. ワンネーション保守主義から見たイギリス保守党の変容

#### (1) 伝統的トーリー主義と民衆的保守主義

ここでは先ず、ジョンソン保守主義の特質の一つとして浮かび上がった伝統的トーリー主義（保守主義）と民衆的保守主義、それぞれの特徴や両者の関係などについて言及しておきたい。

ヒックソンによれば、伝統的トーリー主義のエッセンスは、強烈な「イングリッシュ・ナショナリズム」と結びついた「社会秩序」重視の意識<sup>(12)</sup>とされている。また、ヘフファー（Simon Heffer）は、その具体的な主要観念として、①「主権」（国民の合意に基づいて立法活動を行う「議会における国王」が伝統的トーリー主義のデモクラシー観では中核を成すので、必然的に「反EU」の立場となる）、②「地方分権」（但し、スコットランド自治政府に代表される地域政府の設置には反対する一方、ブリティッシュなトーリー主義の最大構成要素であるイングリッシュ的要素は当然視する立場）、③「家族」（結婚した夫婦やその子供で構成され、制度的ヒエラルヒーの基礎となるユニット）に加え、④「思いやりと社会奉仕」（国家による行為ではなく、個々人の義務として、あるいは互いに支え合う家族を通じてなされる行為）そして、⑤「社会」（周近的なものであれば他の文化も受け容れるモノカルチャー的捉え方）がある<sup>(13)</sup>と述べる。

次に、こうした一連の伝統的トーリー主義の実現に不可欠なメカニズムは、かつては経済保護主義だったかもしれないが、1960年代以降になると「自由市場アプローチ」（自由市場リベラリズム）がそれに代わった<sup>(14)</sup>。その後、保守党の「トラディショナリスト」的アプローチ（いい換えれば、伝統的トーリー主義）は、大まかにいえば「エリートイズム」路線と「ポピュリズム」路線の二つに分裂したとされている。そして第二次世界大戦後、「敬意」を重視する風潮が従来に比べて衰退したことに伴い、60年代以降前者よりも後者、即ち（保守主義者の多くが元来懐疑的だった）「ポピュリズム」路線に基づく戦略が主流になっていった<sup>(15)</sup>と主張するのである。

ここでいう「ポピュリズム」路線アプローチのポイントは、ヒックソンによ

ると、「抽象的プリンシプルに基づく政治」を拒絶する反・合理主義の政治表明である。それが60年代以降になると、「反移民の立場」と「イギリスの伝統的諸制度へのリスペクト」が結びつき、最終的に「イングリッシュ・ナショナル・アイデンティティ」志向と関連するようになった<sup>(16)</sup>と説明されている。それゆえ、伝統的トーリー主義と民衆的保守主義の関係は、一見矛盾しているようで実は（とりわけヨーロッパ統合が深化・拡大した1990年代以降のイギリス政治においては）様々な姿の「欧州懐疑主義」(Euro scepticism)を媒介として、双方結びつきやすい関係に変化したと理解できるのである。また、そうしたイギリス保守党・保守主義の変容という文脈の延長線上に、ジョンソンを位置づけていく必要もあるであろう。

このように、従来型「エリート主義」が比較的衰退状況にある今日において、伝統的トーリー主義と民衆的保守主義は必ずしも矛盾する関係ではなくなってきたことが分かる。加えて、伝統的トーリー主義がその前提とするポピュリズム的側面は、政治的急進派の掲げる合理主義に反発し「国民のコモンセンス」を重視する特徴と、非公選の大都市エリートが「上から」押しつけがちで抽象度の高い「政治的コレクトネス」(Political Correctness)にも反発して保守党こそ「国民」の真の擁護者だと主張し続けたりする伝統を併せもっている。しかもこうした側面は、ジョンソン党首を通じて現在の保守党政治にも残っている<sup>(17)</sup>可能性が高いと見なければならない。

## (2) イギリス保守党におけるワンネーション保守主義——その神話と遺産

「はじめに」でも触れたようにEUレファレンダムにおける立場の違い、即ち残留派(キャメロン)と離脱派(ジョンソン)の対立に伴い、キャメロンとジョンソンは袂を分かた結果となってしまった。とはいえ、キャメロンが党首選出馬を2005年6月に表明した当時、その事務所開きに参加した15人の中にジョンソンも入っていたとされる。それどころかキャメロンは、ジョンソンも自分と同じワンネーション保守主義者(One Nation Conservatives)ゆえ、同じチームの一員だと認識していた<sup>(18)</sup>。彼はその回顧録の中でこのように述べて



いるのである。キャメロンのミスリーディングでないとすれば、これは一体どうということなのであろうか。

ワンネーション保守主義とは、19世紀イギリス（ヴィクトリア朝後期）を代表する保守党政治家デズレーリ（Benjamin Disraeli）元首相の政治理念をモチーフとした立場である。一般的には、当時対立関係にあった「持てる者」と「持たざる者」という「二つの国民」を「一つの国民」（One Nation）に統合するため、公衆衛生や貧困問題解決など、とりわけ国家（政府）の果たすべき家父長的役割を重視する考え方として理解されることが多い。したがって、伝統的にワンネーション保守主義では、保守党は特定の階級利益のみを追求してはならず、国民政党として国民全体の利益を包括的に追求すべきであるとされた<sup>(19)</sup>。

さらにキャメロンには、こうしたワンネーション保守主義の伝統に加え「党内モダナイザー」（moderniser）の側面もある。これは、保守党が万年野党の状態（1997～2010年）から脱し、かつてのように都市部有権者層の多くからも支持される穏健な中道右派の統治政党として復活するには、とりわけブレア（Tony Blair）労働党を手本としながら、右傾化ないし硬直化した保守党の主張やその運営の「現代化を促進する」必要があるという立場を指す。また、モダナイザー派のイデオロギー的立場は「自由市場・社会リベラル・ソフトな欧州懐疑主義」となる。いずれにしても、キャメロンから見た場合、モダナイザー派は保守党内「キャメロン支持派」の中核を成すことから、これにワンネーション保守主義者を加えた保守党議員たち、即ち「ワンネーション・モダナイザー」の保守主義者こそ「広義のキャメロン派」と考えてよい。

既述のようにキャメロンはジョンソンをほとんど身内同然と考えていたので、ジョンソンを「ワンネーション・モダナイザー」として位置づけることも可能ではある。それに加え、後述するように、2015年10月に開催された保守党大会では、ジョンソン自身もキャメロンと同じワンネーション保守主義の見解を明確に表明している<sup>(20)</sup>からである。そこでここからは、イギリス保守党・保守主義の現状をよりの確に把握するため、このワンネーション保守主義という立場・概念について再検討してみることにしよう。



イギリス保守党史研究の分野において「ワンネーション」という言葉は、しばしば「サッチャー派保守主義」への対抗概念として用いられ、党内右派に対する党内左派の立場を示す用語として理解されたりするのが一般的である<sup>(21)</sup>。しかしながら、例えばかつてサッチャーは、「財産所有」(property ownership) の概念をワンネーション保守主義のエッセンスとして唱道したことがあるという。また、党内右派(頑固な欧州懐疑派)を代表して2001年保守党党首選挙に出馬したダンカンミス(Iain Duncan Smith)元党首も、その対抗馬で党内左派とされるクラーク(Kenneth Clarke)同様、ワンネーションの伝統を支持する旨を表明している<sup>(22)</sup>。繰り返しになるが、何故このようなことが可能になるのであろうか。

この点についてイギリスの政治学者シーライト(David Seawright)は、歴史的に見た場合「ワンネーション」が保守党左派の立場を表すとは限らないとしたうえで、一般に思われている以上に保守党がドクトリン的政党であることに気づくべきだと主張している。つまり彼によれば、ワンネーションとは、総論的に見れば保守主義の伝統的コア・エレメントの一つであるが、各論的に見ると、保守主義者自身の「セルフ・リニューアル」プロセス促進において比較利用しやすい多義的な概念ということになる<sup>(23)</sup>からである。

したがって、「ワンネーション保守主義は保守党内左派を代表する特定の傾向で、経済社会への国家介入を積極的に容認する進歩的立場を指す」という従来の見方は、極論すれば最早「神話」といっても過言ではないかもしれない。「ワンネーションのこうしたエトスは、一つ概念構成であると同時に、保守主義の思想における複数のコア・エレメントから構成されたものであって、…そうしたコアな保守主義概念の型や部品の交換に必要なプロセス促進を手助けするうえで、決定的に重要な力をもっている」<sup>(24)</sup>とシーライトは考える。それゆえ、保守党政治家ないし保守主義者であれば、その立場が如何なるものであろうと、「ワンネーション」(一つの国民)の実現という「目標」を達成するための「手段」という形であれば、保守主義という枠内で様々な立場を表明できることになるわけである。

こうした観点から見れば、元来キャメロンの盟友で、その後 EU 問題をめぐって対立関係に陥ったジョンソンも、キャメロンとは異なるタイプの「ワンネーション」保守主義者として評価できることになる。保守主義の伝統的な武器あるいは「遺産」としてのワンネーションイメージは、より穏健な保守党議員たちの浮動票を取り込むのに役立つので求心力を維持しやすい<sup>(25)</sup>。加えて、党内の様々な傾向を超越して有権者にアピールできるのもその特長の一つである。同時に保守党側からすれば、「労働者階級という一部の利益しか代表しない狭量でセクショナルな存在」という理由で、(特にニューレーバー以前の)労働党を攻撃する際の便利な道具としても機能してきた。

そうした意味では、多面的なワンネーション保守主義を否定したり、これに対抗したりできる概念が保守党内においては存外生じにくく、逆にこれを時代毎に再解釈・再利用し続けているのが現代イギリス保守主義・保守党(の本質)といえるのかもしれない。

では、(いわゆる党内左派、国家介入志向という従来の固定観念から切り離れた)「新しいタイプのワンネーション」保守主義者としてジョンソンを理解した場合、その具体的な表明はどのような点に見出せるのであろうか。最後に、ジョンソンの2019年保守党マニフェストなどを中心に、その点を明らかにしていくことにしよう。

### (3) 2019年イギリス総選挙に見るジョンソン流ワンネーション保守主義

2019年イギリス総選挙における保守党マニフェスト(その骨子)を分析する前に、「ワンネーション」保守主義に関するジョンソン演説のポイントを先ず振り返っておきたい。

既述のようにジョンソンは、2015年の保守党大会で、キャメロンと同じワンネーション保守主義者としての立場とその見解を明らかにしている。インデペンデントによると、ジョンソンは「ワンネーション保守主義の構図を描いたが、それは『社会的経済的進歩 (social and economic progress) をもたらす』ために資本主義を用いるというものであり、富裕層と貧困層との溝は、これを広げな

いようにしていく必要がある」<sup>(26)</sup>という内容であった。また、ニューステイマンによる解説では、「自身を“One nation Tory”と位置づけながら」…「『最大限働いているのに最低限の賃金しかもらっていない人たちを保護』するよう党に呼びかけた」<sup>(27)</sup>とある。

こうしたジョンソンの言説で注目されるのは、「社会的経済的進歩をもたらすために資本主義を用いる」というくだりであろう。これは、「進歩的な目標は保守主義的手段によってのみ最善の形で達成されるという考えが進歩的保守主義 (progressive conservatism)」<sup>(28)</sup>だとするキャメロン流「進歩的保守主義」観と、ほぼ合致しているからである。そうした意味では、EUをめぐって両者の立場の違いが鮮明になったとはいえ、ジョンソンの保守主義とキャメロンの保守主義は、根本から対立するものではないということになる。

さて、2019年イギリス総選挙における保守党マニフェスト『イギリスのEU離脱をやり遂げて、イギリスの潜在能力を最大限発揮させる』(Get Brexit Done Unleash Britain's Potential)の骨子および序論のポイントは、表6のとおりである。

サッチャー以来保守党はNHS(国民保健サービス)の充実化に冷淡との理由で批判されることも多く、それが1990年代後半以降におけるニューレーバーの勝因の一つでもあった。ところがこのマニフェストでジョンソンは、自らの政権を“One Nation Conservative Government”と位置づけており、NHSの充実化、あるいは環境問題への取り組みなどについても、それなりに言及していることが分かる(表6を参照)。

しかしながら他方で、「わが党が、とびきり上等な公共サービスやインフラの存在価値を信じるのは、単にそれら自体が良いからというだけでなく、それらがダイナミックな自由市場経済の根本だからでもある」(下線引用者)と述べて、現代イギリス保守主義の根本思想というべき「自由市場経済」の意義を唱えることも忘れていない。それに加え、犯罪者に対する罰則強化やポイント制に基づいた移民規制システムの導入、増税等の拒絶、税負担の少ない経済づくりなども同時に主張されている(表6)。かような点はサッチャー的自由市場

表6 イギリス保守党2019年総選挙マニフェストの骨子

**私からの約束：**

- ・ 1年で看護師がさらに5万人、一般診療所（GP）担当外科医への予約可能件数がさらに5,000万件となるように、NHS 向けの追加資金援助を行う。
- ・ 警察官がさらに2万人となるようにすると共に、犯罪者に対する罰則を強化する。
- ・ オーストラリア方式の、ポイント制に基づいた移民規制システムを導入する。
- ・ 債務を抑え込む一方、科学・学校・研修実習生・インフラに関しては、毎週数百万以上の投資を行う。
- ・ 二酸化炭素排出量とそれに伴う環境汚染を減らすため、クリーンエネルギーの充足やグリーンインフラの整備に向けた投資を行うことで、2050年までにネットゼロ到達を目指す。
- ・ 所得税やVATの税率、国民保険料の引き上げは行わない。

12月13日にジェレミー・コービン氏の労働党とニコラ・スタージョン氏の SNP が勝利を取めた場合、Brexit とスコットランド独立のレファレンダム二つが2020年に実施されることになるでしょう。

**序論のポイント (抄)：イギリスの EU 離脱をやり遂げる。…**

**One Nation Conservative Government** としては、20件の病院改善や40件の病院新設に伴い過去最大規模の現金給付増を NHS 向けに実施する一方、1年で看護師がさらに5万人、医師がさらに6,000人、そして一般診療予約がさらに5,000万件となるようにしていく。

この総選挙を通じて保守党政権が継続となったら、この国のためにインフラ革命を実施する。今こそ、わが国の道路改善をはじめ、全ての家庭・企業向けギガビットのブロードバンド整備という大胆なプログラム同様、the Northern Powerhouse Rail や Midlands Rail Hub, その他もっと多くのプロジェクトに投資を行っていくべき時だ。

わが党が、とびきり上等な公共サービスやインフラの存在価値を信じるのは、単にそれら自体が良いものだからというだけではなく、それらがダイナミックな自由市場経済の根本だからでもある。

ジェレミー・コービン氏率いる現代労働党の悲惨なところは何かと言えば、利益をあげたいという気持ちを同党がかなり本能的に嫌っている点——そしてかなり無茶苦茶に増税して——この国の繁栄の基盤そのものを崩壊へと導こうとしている点にある。…わが党としては、これまでにないほど強力で、従来以上にダイナミックな経済を運営していく。

わが党としては、ギスギスした二つのレファレンダムで2020年を無駄にしたくない。…高賃金、高度のスキル、税負担の少ない経済をつくるため、教育やインフラ、テクノロジーへの投資プログラムと共に、わが党は歩んでいきたい。

出典 *Get Brexit Done Unleash Britain's Potential* The Conservative and Unionist Party Manifesto 2019 ([https://assets-global.website-files.com/5da42e2cae7ebd3f8bde353c/5dda924905da587992a064ba\\_Conservative%202019%20Manifesto.pdf](https://assets-global.website-files.com/5da42e2cae7ebd3f8bde353c/5dda924905da587992a064ba_Conservative%202019%20Manifesto.pdf)) に基づき筆者作成。(■■■■ 本稿執筆者)



リベラリズム，もしくは伝統的トーリー主義や民衆的保守主義の表れと見ることができよう。

したがって2019年イギリス総選挙から見た現在のジョンソン保守主義は，実は多面的な「ワンネーション」の伝統を基本としつつも，その一方でワンネーションの意味をEU離脱後の現在に相応しくリニューアルした内容といえるかもしれない。同時にそれは，福祉国家を容認してきたかつてのイギリス保守主義などに比べ，確かに「右傾化」(前掲註(11)を参照)したと見ることができよう。以上の考察からすれば，イングランドを中心に据えた「イギリス」としてEUに反発し，その結果EUからの完全離脱を果たすことによって真の「一つの国民」が実現する。これまでの分析や検討を踏まえると，ジョンソン流保守主義の底流には，こうした考え方も潜んでいると推察される。

それゆえ，多面性を伴う「ワンネーション」保守主義の伝統がイギリス保守党に存在したからこそ，ジョンソンの保守主義は，自由市場リベラリズムはいうまでもなく，欧州懐疑主義(特にhard BREXIT)などを軸として伝統的トーリー主義や民衆的保守主義を強調(即ち右傾化)することも可能となった。そして，それによって，逆に(キャメロンやメイの時代以上に)新鮮な「党内向け」の立場や好印象を最初から与えることができるようになった。その結果ジョンソンは，変容した(1960年代当時に比べ相対的に右傾化した)保守党の「新党首」に相応しい候補者として，党内から終始圧倒的に支持されたと考えられるのである。

#### 4. おわりに

本論で考察されたように，イギリス保守党・保守主義における「ワンネーション」の伝統こそ，実はジョンソン保守党・保守主義の現状とその変容(相対的右傾化と，それに伴うジョンソン党首の誕生)を理解するカギであった。いい換えれば，そうした「ワンネーション」保守主義とその伝統があったからこそジョンソンは，相対的に右傾化した保守党内で支持を固め，党首選挙で勝ち残



るために自らの政策的立場（保守主義）を「右」にシフトさせたり，セルフ・リニューアルさせたりすることができたといつてよい。

しかしそれは，ワンネーション保守主義者としての姿勢を根本から否定するものではなかつた。「党首」を目指すジョンソンは，EUに対抗するため「ワンネーション」の伝統を一種の「武器」として用いることで，党内受けの良い形でセルフ・リニューアルすることに，つまり保守党の右傾化にも上手く「適応」できるリーダーという印象を与えることに成功したのである。そうした意味で，イギリス保守党・保守主義の現状と変容を「党首」という立場で体现したジョンソンの保守主義は，欧州懐疑主義に立脚しつつ途中から「イギリスのEU離脱とその後」を意識した結果，特に自由市場リベラリズムや伝統的トーリー主義を（党内の現状に合わせて）今日風にリニューアルした「新しいタイプのワンネーション保守主義」と見ることもできよう。この点については，BREXITと経済改革の文脈で保守主義をリニューアルし，イデオロギー的にもシフトしていく時代をイギリス保守主義は迎えた<sup>(29)</sup>，とクラインズが結論づけていることから明らかである。

さらにこのことは，（院内および院外も含めた）イギリス「保守党」関係者の大多数が，そうした「党首」の下で，そのようにリニューアルされたがっていたことを意味している。EU強硬離脱派向けに独自のワンネーション保守主義で武装した「党首」候補を，従前から右傾化していた「党」内多数派が支持するのは，ある意味当然であろう。いずれにせよ，こうした「党と党首」関係の構図を見る限り，政党におけるリーダーの個性がより重要視されるようになった昨今でも，イギリス保守党に関しては，「党首」に加え，あるいはそれ以上に「院内保守党」の現状や変容にも注目すべきだといわざるを得ない。

しかしながら本稿では，紙幅の制約もあり，イギリス保守党内での「党」（とりわけ院内保守党）と「党首」の関係やその変容について，より詳しく論究することができなかつた。そこで本稿の続編では，そうした部分にも可能な限りスポットを当てて，イギリス保守党・保守主義の現状をさらに深く掘り下げて追究していく所存である。

- (1) David Cameron, *For the Record* (London: William Collins) 2019, p. 409, pp. 651-652, p. 654.
- (2) 宇野重規『保守主義とは何か 反フランス革命から現代日本まで』中央公論新社, 2019年, 18頁。
- (3) 同上。
- (4) Robert Leach, *Political Ideology in Britain*, third edition (London: Palgrave) 2015, p. 57.
- (5) Philip Lynch, “Cameron, Modernisation and Conservative Britain”, in Simon Griffith and Kevin Hickson (eds.), *Ideology after New Labour* (Basingstoke: Palgrave Macmillan) 2010, p. 119.
- (6) R. Reach, *op. cit.*, p. 58.  
 因みにリーチは、(イギリス) 保守主義で重視される価値について、以下の概念を指摘している。  
 「保存・反動・変革」「伝統」「人間の不完全性」「有機的社会観」「権威とリーダーシップ」「プロパティの擁護」「ヒエラルヒーと不平等」「パターンリズム・社会改革・コレクティヴィズム」「リバタリアニズム」「ナショナリズム」
- (7) Kevin Hickson, “Introduction”, in K. Hickson (ed.), *The Political Thought of the Conservative Party since 1945* (Basingstoke: Palgrave Macmillan) 2005, p. 3.
- (8) もっとも、2005年保守党党首選挙で党員決選投票を制したキャメロンの得票率は68% (ジョンソンは66%) だったので、その点でジョンソンはキャメロンにはおよばなかったことになる。  
 キャメロン保守党を誕生させた2005年イギリス保守党党首選挙については、拙稿「2005年イギリス保守党党首選挙の特質と意義」(『日本選挙学会年報 選挙研究』No. 23 日本選挙学会/木鐸社, 2008年所収) を参照されたい。
- (9) Andrew Crines, “Boris Johnson and the Future of British Conservatism”, *Political Insight*, Political Studies Association: UK, August 2019. (<https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/2041905819871835>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]
- (10) A. Crines. (<https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/2041905819871835>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]
- (11) ある政党の「右傾化」という場合多義性が必然的に伴うため、その現象および概念の意義について一応明確にしておきたい。  
 2001年総選挙を控えた当時のヘイグ (William Hague) 党首がニューレーバーとの違いを鮮明にするため任期途中で党路線を方向転換した結果、保守党は「ヨーロッパに関しては懐疑派の方向へ、法と秩序に関しては権威主義の方向へ、そして移民に関しては邦人ファーストの方向へ」それぞれシフトすることになったと、現代イギリス保守党研究の泰斗バイル (Tim Bale) は述べている。Tim Bale, “Who leads and who follows? The symbiotic relationship between UKIP and the Conservatives — and populism and Euroscepticism”, *Politics*, 38-3, August 2018, p. 266.

そこで本稿は、サッチャー党首登場（1975年）以前と比較して、党全体の主流が相対的に「自由市場主義志向（戦後福祉国家批判や社会格差是認など）、社会保守志向（同性婚への反対など）、欧州懐疑主義志向（移民規制の強化や、ポンド維持からEU 離脱実現を含む国家主権回復への拘りなど）」に変化・シフトしていく現象という意味で、「右傾化」という言葉を用いることにしたい。したがって、イギリス保守党における右傾化傾向の具体例として、党内穏健派・左派系議員数の減少や、党首による党内人事（党内要職からの穏健派議員の排除）なども含まれることになる。

(12) K. Hickson, “Inequality”, in K. Hickson (ed.), *op. cit.*, p. 186.

(13) S. Heffer, “Traditional Toryism”, in K. Hickson (ed.), *op. cit.*, pp. 199-200.

(14) K. Hickson, *op. cit.*, p. 186.

(15) *Ibid.*, pp. 186-187.

(16) *Ibid.*, p. 187.

(17) A. Aughey, “Traditional Toryism”, in K. Hickson (ed.), *op. cit.*, pp. 14-15.

その中でオーギーは、国民の（元来、保守的な）意思というその特殊かつ制限されたセンスにおいて、トーリー主義は常にポピュリスト的誘惑に従属している（ポピュラー・トーリー主義である）とも述べている。

(18) D. Cameron, *op. cit.*, p. 82, p. 652.

(19) 拙稿「イギリス保守党・保守主義の現状に関する一考察—保守党中道派の保守主義に焦点を当てて—」（『政経研究』第54巻第4号，日本大学法学会，2018年）154頁。また、ヒックソン・モデルに基づくワンネーション保守主義のイデオロギー的立場については、前出表3の④を参照されたい。

(20) D. Cameron, *op. cit.*, p. 652.

(<https://www.independent.co.uk/news/uk/politics/boris-johnsons-tory-coference-speech-on-the-toxic-moonshine-of-communism-goes-down-a-storm-a6683006.html>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]

(<https://www.newstatesman.com/politics/uk/2015/10/boris-johnson-shows-why-he-remains-contender-his-best-speech>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]

(21) 第二次世界大戦後におけるワンネーション保守主義の展開については、R. Leach, *op. cit.*, pp. 69-70 を参照。

また、サッチャー時代のワンネーション保守主義に関する比較的分かりやすい概説書として、Francis Pym, *The Politics of Consent* (London: Sphere Books) 1984（戸沢健次訳『保守主義の本質』中央公論社，1986年）も参照されたい。

(22) David Seawright, “One Nation”, in K. Hickson (ed.), *op. cit.*, p. 35, p. 69.

(23) *Ibid.*, p. 31, p. 69.

(24) *Ibid.*, p. 29.

これに加えてシーライトは、「1960年代当時の保守党内左派がワンネーションの意味を意図的に曲解し、党内ヘゲモニーの確立に向けて利己的に用いた結果、1970年代末から1980年代にかけて、反サッチャリズムを意味する暗号的用語として今日の

評論家たちがワンネーションを利用するようになった」と述べている。*Ibid.*, p. 83.

- (25) Tim Bale, *The Conservative Party From Thatcher to Cameron*, second edition (Cambridge: Polity Press) 2016, p. 31.
- (26) (<https://www.independent.co.uk/news/uk/politics/boris-johnsons-tory-coference-speech-on-the-toxic-moonshine-of-communism-goes-down-a-storm-a6683006.html>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]
- (27) (<https://www.newstatesman.com/politics/uk/2015/10/boris-johnson-shows-why-he-remains-contender-his-best-speech>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]
- (28) D. Cameron, *op. cit.*, p. 204
- (29) A. Crines. (<https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/2041905819871835>) [2020年5月14日閲覧・最終確認]

[付記] 本稿は、2020年度日本比較政治学会研究大会報告論文（未定稿）「イギリス保守主義から見たボリス・ジョンソン：ポピュリストか、それともワンネーション・モダナイザーか」を加筆・修正した内容である。今回オンラインで実施された研究大会では、討論者から貴重なコメントやアドバイスを数多く頂戴した。記して感謝の意を表したい。